

教職課程におけるNIE実践の有効性：「日本語表現法?」における新聞スクラップブックの作成

著者	伊木 洋
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要. 外国語・外国文学編, 文化学編, 日本語・日本文学編 = Notre Dame Seishin University kiyo
巻	40
号	1
ページ	188-168
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000028/

教職課程におけるNIE実践の有効性

——「日本語表現法Ⅰ」における新聞スクラップブックの作成——

伊 木 洋

はじめに

本稿では、ノートルダム清心女子大学二〇一四年度Ⅰ期教職課程（中等国語）必修科目「日本語表現法Ⅰ」（3年次）における新聞スクラップブックの作成を取り上げ、教職課程におけるNIE実践の有効性について考察する。

「日本語表現法Ⅰ」は、日本語日本文学科の学科科目として卒業に必要な単位として認められている。また、教職課程（中等国語）の必修科目となっており、教職課程（中等国語）履修生は全員履修している。なお、日本語教員養成課程履修生であれば、日本語日本文学科以外の学科の学生も履修することが可能となっている。

「日本語表現法Ⅰ」では、コンポジション理論を基礎として、文章を書くための知識と方法を学ぶとともに、文字言語及び音声言語による表現活動を通して、言語表現能力の向上を図っている。大学生として、社会人として、さらに中学校・高等学校の国語科教師及び日本語教師として求められる文章表現力及び音声言語活用能力の向上を図るとともに、その指導法、とりわけ「書くこと」の学習指導について理解を深めることを目指している。

「日本語表現法Ⅰ」では、書くことの生活の自己点検を学びの出发点とし、定義、描写、説明、論証、物語、書き出しの工夫、聞き書きなど、さまざまな文章表現の基本について実作を通して学んでいく。「書くこと」の学習指導についても理解を深めさせるため、中等国語教育の先達であり、NIE（注1）の先駆者でもある大村はま氏の実践を紹介しつつ、学びを深めている。そうした基本的な学びを生かし、全体のテーマに即してグループごとに課題を決定し、文章表現の実の場として文集作成に取り組んでいる。

新聞スクラップブックの作成は、基本的な学びの一環として文章表現の工夫を学びつつ、社会と結び、さらに、語句・語彙を豊かにする学習指導や各領域の学習指導など、国語教室における新聞を活用した単元づくりに関心を持たせたいという願いに基づく取り組みである。

一 大村はま国語教室におけるNIE実践

橋本暢夫氏は、我が国の中等国語教育において、学習者を優秀のかなたに導いた大村はま氏をNIEの先駆者と位置づけ、大村はま国語教室における新聞を教材とする実践について次のように記している。

大村はま実践の特色は、国語教室を言語生活を営む場とし、一人の日本人として生きていく基本の力を、主体的な学習を通じて、中学生一人ひとりの身につけていった点に見出すことができる。

そのために大村は、社会生活のなかにおける言語能力の分析をすすめ、それらを実践にうつしてきた。新聞を教材とする実践もその工夫の一つである。

一人前の社会生活を営んでいくためには、読むべきものがあれば探して読むことができ、書くべき時に内容・相手を考えて明晰に書けねばならない。それにもまして、社会生活に必要な言葉の力は、学力の基本でもある「聞く力」であり、「話し合う力」である。この考えを基底に、大村教室では生徒と指導者の「対話」が重視された。先生から問いかける「問答」だけでは「話す力」は育たないからである。新聞を資料とする学習は、未知の情報の内容や背景を指導者も共に考え合う自然な「対話」の場であった。

（橋本暢夫『大村はま「国語教室」の創造性』二〇〇九・四・一七 溪水社 二五〇頁）

橋本暢夫氏は、大村はま国語教室における新聞を教材とする実践を、一人の日本人として生きていく基本の力を学習者一人ひとりに身につけさせるための工夫の一つであったと説いている。一人前の社会生活を営んでいくための「聞く力」「話し合う力」「書く力」「読む力」の育成が目指され、「対話」が重視された大村教室において、新聞を資料とする学習は、指導者も共に考え合う自然な「対話」の場であったと指摘し、新聞を資料とする学習の価値を明示している。

大村はま国語教室における新聞を資料とする学習について、橋本

暢夫氏は次のようにも述べている。

大村の希っていた民主的で戦争のない平和な世界を築くためには、次の社会を担う、現在の子どもたちが、お互いに知り合うこと、理解し合うことが最も大切であり、また、民主社会成立のための世論形成に新聞は欠くことができないとの考えにたつて、アメリカにおいてNIE運動が提唱される以前から、大村は新聞の意義・役割を体得させ、それを活用させるための研究、さらに「学校新聞・学級新聞」の制作・交流を重視してきた。そこには、新聞の編集計画についての話し合いと、発行に至る「実の場」を通じて、協力し合う作業の中に、一人ひとりに応じた役割があること、同時にさまざまな種類の文章を書く機会があり、それらが学習者一人ひとりにことばに関心を向けさせ、ことばへの自覚をもたせ、ひいては教育本来の目的である「自己を確立させる」即ち個性を伸ばす」営みとなっていくことが見通されていた。

（橋本暢夫『大村はま「国語教室」の創造性』二〇〇九・四・一七 溪水社 二五一頁）

橋本暢夫氏は、大村はま国語教室では、「民主社会成立のための世論形成に新聞は欠くことができない」という考えにたつて、アメリカにおいてNIE運動が提唱される以前から、新聞の意義・役割を体得させ、それを活用させる取り組みがなされてきたと述べている。新聞の編集計画についての話し合いと、発行に至る「実の場」を通じて、協働的な学びが展開されるとともに、「書くこと」の学習としてもさまざまな種類の文章を書く機会があり、それらが、学

習者一人ひとりにことばに関心を向けさせ、ことばへの自覚をもたせることにつなげていく。大村はま国語教室では、新聞を資料とする学習が、新聞の意義・役割を体得させつつ、教育本来の目的である「自己を確立させる」即ち「個性を伸ばす」営みとなっていくことが見通されていたと明言されている。

二 NIE学習への提案

橋本暢夫氏は、大村はま国語教室に学んできたことをふまえ、次のようなNIE学習への提案を行っている。

NIE学習への提案

志向していく方向

「新聞から学ぶ」「新聞で学ぶ」とともに「新聞に学ぶ」へ

新聞は民主社会の「世論形成」に欠くことのできぬもの、との前提に立つ。

○NIE学習の目的と目標

・目的 Ⅱ教育活動の一環として、自己をみつめさせ、社会的存在としての自己の確立をはかる。即ち人生・社会と結び、個性を伸ばす教育である。

・目標

1 新聞に対する関心・必要感を高める。(まず自己の興味のあるようを確認させる。但し、移ろいやすい子どもの興味を追わない。関心を持つべきものに関心を持たせるのが指導者の仕事)

2 自ら新聞を読もうとする意欲をたかめ、新聞を読む習慣・態度を身につけさせる。(生涯、活字を読むことはもとより、図表・グラフ等をも「よむこと」から離れることのない読書生活人としての基礎に培う。)

3 新聞に関する理解を深め、新聞を深く読む能力を伸ばす。(日本語によって考える)

ア ひとつの事象には、さまざまな捉え方・考え方があることに気づかせる。

イ 新聞を比べ読むことで判断力を育て、メディアリテラシーを身につけさせる。

ウ さまざまな事象について自分の意見をもち、それを発信していく態度を育てる。

エ 協同学習で身につく、社会的言語技能(コミュニケーション力)を育成する。

オ 将来の社会人としての語彙を豊かにしていく。

「語彙が身につくことは、心が拓かれていくこと」である。
カ 自己評価力を育て、自己の課題に気づかせて自己学習力を発動していく態度を養う。

4 学校生活・学習生活を向上させるため、学校新聞・学級(グループ)新聞、また、壁新聞・掲示などを制作する。

NIEの学習は指導者にとっても、未知の情報の内容や背景を考え、生活的に学び、自己を確立していく「実の場」である。

(橋本暢夫『大村はま「国語教室」の創造性』二〇〇九・四・一七 溪水社 二六〇―二六一頁)

橋本暢夫氏は、大村はま国語教室に学び、「新聞は民主社会の世論形成に欠くことのできぬもの」との前提に立って、NIE学習の目的として、「社会的存在としての自己の確立をはかる」即ち「個性を伸ばす人格の完成」を明示している。

その具体的目標として、四つの目標を掲げている。1に「新聞に対する関心・必要感を高めること」をあげている。学習者に自己の興味・関心のありようを確認させることから出発しつつ、「関心をもつべきものに関心をもたせる」ように指導することが大切であると説いている。NIE学習において、自己の興味・関心を出発点としつつ、社会と結びつけ、考えてみるべき課題に目を向けさせていくことが目指されている。

2の目標には、新聞を読む意欲・習慣・態度を身につけさせ、文字を読むことはもとより、図表やグラフなどさまざまな情報を読むことから離れない読書生活人としての基礎に培うことが示されている。ここでは非連続型の情報を読むことにも配意がなされ、NIE学習において読書生活人の育成が目指されている点に注目したい。

3の目標は、日本語によって考える力、即ち思考力育成のための目標である。「新聞に関する理解を深め、新聞を深く読む能力を伸ばす」ために、アからカの六項目が示されている。ア「ひとつの事象にはさまざまな捉え方・考え方があること」、イ「判断力・メディアリテラシー」、ウ「自分の意見の形成、発信」、エ「協同学習で身につく社会的言語技能（コミュニケーション力）」などが示されており、いずれも未来に生きる学習者に現在求められている学力が目標に掲げられている。

橋本氏は六項目のうち、オ「将来の社会人としての語彙を豊かに

していく。」とカ「自己評価力を育て、自己の課題に気づかせて自己学習力を発動していく態度を養う。」を日本的NIE学習の重点としてあげたいと記している。オでは、「語彙が身につくことは、心が拓かれること」であるとし、NIE学習において、自己の思索を深め、自己の考えを表すことばを獲得させることばの力を育てることが目指されている。カでは、NIE学習において、「自己評価力」を育てる場の設定が求められ、自己の課題に気づかせ、課題解決に向けて自ら学んでいく態度の育成が目指されている。

三 新聞スクラップブック作成のねらい

「日本語表現法Ⅰ」では、さまざまな文章表現の基本について実作を通して学ぶとともに、「書くこと」の学習指導について理解を深めさせることを目標に掲げている。さまざまな文種の指導について具体的に学ぶために、大村はま氏が『中学作文』（注2）に示している述べ方の指導の実践を取り上げ、実際に提示されている課題を実作することを通して、学びを深めている。そうした基本的な学びを生かして文集作成に取り組んでいく。

文章表現の工夫を学びつつ、社会と結び、さらに、橋本氏が重点として取り上げている語句・語彙を豊かにする学習指導や各領域の学習指導において、新聞を活用した単元づくりに関心を持たせることをねらいとして、新聞スクラップブックの作成に取り組んでいる。本学では自宅から通っている学生が多いが、受講生に尋ねてみると新聞を購読していない家庭が増えていることもあり、また、インターネットの普及もあって、新聞を毎日読むことが習慣となってい

る学生は思いのほか少ないという実態が明らかになった。

橋本氏の提案をふまえ、新聞スクラップブックの作成を通して、自己の興味・関心を出発点として、社会と結んで考えてみるべき課題に目を向けさせ、「民主社会の世論形成に欠くことができない」新聞に対する関心・必要感を高めさせることを目指すこととした。新聞スクラップブックを作成するためにはどうしても新聞を読む必要がある。社会と結んで考えてみるべき課題に目を向けさせ、さまざまな種類の文章に触れて文章表現の工夫を学びながら、新聞を読む意欲・習慣・態度を育成していく。

日本語によって考える力、思考力の育成についても、選んだ新聞記事について要約し、文章表現の工夫についても分析、考察することを通して、さまざまな捉え方があることを知り、判断力や自己の意見を形成していくことができる。また、自己の考えを表すことばの獲得、自己の文章表現に生かしていきたい課題の自覚化を図っていくことも可能である。文集作成は、新聞スクラップブックの作成を通して学び得た文章表現の工夫を生かす場として位置づけた。

さらに、国語教室における語句・語彙を豊かにする学習指導や自己の課題に気づかせ、課題を解決していく学びを実現するものとして、新聞を活用した単元の可能性についても触れ、受講生に新聞スクラップブック作成の意義を伝えて実践に入っていく。

四 新聞スクラップブック作成の実際

(一) 新聞スクラップブック作成の目的と方法

新聞スクラップブックの作成については、第一回の講義(二〇一四

年四月一五日・火)で次のような学習のてびきを配付し、目的と方法を共有した。

継続課題 新聞スクラップブックの作成 1記事2ページ
ねらい

社会で起きている出来事に関心を持つとともに、筆者の表現の工夫に学びつつ、要約力を高め、感想を育て、自分の意見をもつ。

1 A4版ノートの購入(ルーズリーフ不可)

2 1週間の新聞記事の中から、次の観点に即した記事を2つ以上選ぶ。(1記事の中に複数の観点があっても良い。インターネット不可)

A 内容的に優れていると感じたもの

(対象への関心、対読者意識、取材内容の充実、視野の広さ、新鮮な話題など)

B 文章表現として優れていると感じたもの

(語彙・語句、表現の分かりやすさ・おもしろさ、レトリック、美しさなど)

*レイアウト、見出し、写真なども含めて良い。

C 内容や表現に疑問を感じたもの

(語彙・語句、重要な点の指摘不足、偏りを感じる表現など)
3 2で選んだ記事を切り取り、ノートの見開き上段に貼る。A・B・Cと感じた部分にマーカーを引き、簡単なコメントを添える。

4 見開き下段に次のことを書く。

*要約(記事の1/3〜1/4程度に)

*分析・考察 観点A・B・Cについて、具体的に記事を引用

し、理由を述べる。

*まとめ 記事を総合的に評価し、自らの表現に生かせる学び得たことを内容・表現両面から整理する。

5 毎時間持参・提出。点検・交流を実施する。

まず、新聞スクラップブック作成のねらいを明示し、次に、作成の方法を具体的に示した。A4版ノートを用いて継続して作成することとし、記事を選ぶ3つの観点として、A 内容的に優れていると感じたもの、B 文章表現として優れていると感じたもの、C 内容や表現に疑問を感じたものを示した。内容とともに文章表現について目を向けさせるように観点を設定した。記述内容として、要約・分析・考察・まとめを示したうえで、提出・点検・交流について知らせておいた。分析・考察によって、自分の意見をもたせ、まとめて自分の表現に生かせる学び得たことを内容・表現両面から整理させることを重視した。また、毎時間持参・提出させ、伊木が点検することによって習慣化を図るとともに、観点を提示して受講生が相互に交流する場を設け、新聞スクラップブックの充実を図りつつ、意欲を持続させていきたいと考えた。

(二) 新聞スクラップブック作成の実際

受講生の一人であるS・Nさんの作成した新聞スクラップブックの記述を中心に、N・Iさんの作成した新聞スクラップブックの記述も取り上げて考察していく。S・Nさん、N・Iさんはいずれも教職課程履修生であり、4年次の卒業研究において国語科教育をテーマとして研究に取り組んでいる。

S・Nさんは、第二回(二〇一四年四月二日・火)の講義で提出した新聞スクラップブックにおいて、二〇一四年四月一九日(土)の山陽新聞から、文化庁が公開した本来とは別の意味で使われることが多い慣用句を紹介する動画「ことば食堂へようこそ!」に関する記事を取り上げ、次のような要約、評価、まとめを記している。

4/19 山陽新聞

慣用句本来の意味は

第1弾「役不足」ネットに動画 文化庁公開

文化庁は18日、本来とは別の意味で使われることが多い慣用句を紹介する動画「ことば食堂へようこそ!」の公開をインターネット上で始めた。A1995年度から実施している国語に関する世論調査で間違えた人が多かった20個を選び、来年2月まで2個ずつ取り上げる。

動画では、慣用句を本来の意味で理解している人と、間違っている人との間で生じたコミュニケーションのずれをコント風に紹介。B別の意味が生まれた原因も解説している。

C18日の第1弾は「役不足」。本来の意味は「本人の力量に対して役目が軽すぎる」とだが、過去の調査では半数以上が「本人の力量に対して役目が重すぎる」と誤用していた。

次回5月2日は「煮え湯を飲まされる」で、今後「気が置けない」「流れにさおさす」などを取り上げる。文化庁は「コミュニケーションの行き違いを知って、日常生活に役立ててほしい」と話している。

動画はYouTubeの文部科学省公式チャンネルにアップさ

れ、文化庁のホームページから入ることができる。(写真省略)

☆要約

文化庁は18日、本来とは異なる意味で使用される慣用句を紹介する動画をインターネットに上げた。

これは95年度から始まった国語調査で間違えた人が多かった20個を選び、来年2月まで毎月2個ずつ取り上げる。動画では別の意味が生じる原因などについて解説する。

第1弾は過去の調査で半数以上が間違っていた「役不足」について取り上げる。

☆評価

A・国語に関する調査で、誤用している例を取り上げている点に興味を持った。

・月に2個ずつなので、継続して見ることができる。

B・写真もユニークで、本来の意味と誤用した人の割合が載っている良い。

・誤用例「本人の力量に対して役目が重すぎる」と「が書いてあり、わかりやすい」と誤用を防ぐことができる。

C・別の意味が生じた原因の解説、とあるが、今回の「役不足」については、何故生じたのか書いてほしかった。

・コント、別の意味が生じた理由の解説以外にも、他の内容があれば触れてほしい。

☆まとめ

この記事を読んだ時、一番先に写真に目がいった。その後内容も見て面白かったので、取り上げた。

本来の意味「本人の力量に対して役目が軽すぎる」と誤用

「本人の力量に対して役目が重すぎる」との両方が書いてあり、実際使う時に頭に入れておけば役に立つと思う。文化庁の話であり、日常生活に役立ちそうである。

しかし、「役不足」が誤用された原因について何も書いていない。おそらく力不足と混同してしまつて誤用していると考えられるが、それについても触れてほしかった。

自分の作文でも、このようにあらかじめ本来の意味と誤用例を載せておけば、自分も読む人もわかりやすいと思う。

(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年四月二二日提出)

S・Nさんは、Aの観点(内容)について「国語に関する調査で、誤用している例を取り上げている点に興味をもった。」と記しており、国語の教師を目指しているS・Nさんがことばへの関心を高めていることが表れている。また、まとめとして、「本来の意味と誤用の両方が書いてあり、実際使うときに頭に入れておけば役に立つと思う。」と評価したうえで、「『役不足』が誤用された原因について何も書いていない。おそらく力不足と混同してしまつていると考えられるが、それについても触れてほしかった。」と記し、内容を一層充実させるための改善点を指摘している。

この時間の新聞スクラップブックの交流の場面では、S・Nさんの話題の取り上げ方の良さを評価し、受講生全体が自己の興味・関心を出発点としつつ、考えてみるべき話題を選ぶように方向づけた。

S・Nさんは、第三回(二〇一四年五月二日・金)の提出では、二〇一四年四月二五日(金)の山陽新聞から大卒求人増加の記事を取り上げ、同様に要約、評価、まとめを記している。大卒求人話

題を取り上げているのは、大学3年生となり就職に対して関心が高まっていることの表れである。

まとめとして、「この記事は明るいニュースというだけでなく、データをたくさん用いているので、読者にも伝わりやすいので良いと思った。以前作文を書く際、統計などのデータがあると分かりやすく印象に残ると書いたが、今回はグラフも取り入れて目立った。これを見ると、求人倍率、数が約十年間ほど載っているもので、頭に入りやすい。この記事では、見出しの網掛けと明るい話題、そして二つのグラフが印象的だった。しかし、学生と中小企業のマッチングという少し難しい表現もあり、分かりやすい表現に置き換えてほしい。(中略) 自分が文章を書く時に、余裕があればグラフを入れ、納得してもらえるような工夫をしたい。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年五月二日提出)と記している。ここでは、S・Nさんは話題の選び方、データ、グラフの効果を評価し、語句の使用方についての指摘を加えたうえで、自らの表現に生かしていきたいと述べている。

また、第三回(二〇一四年五月二日・金)の提出では、S・Nさんはフィギュアスケートの羽生結弦選手が春の褒章を受賞したことを伝える、二〇一四年四月二九日(火)の山陽新聞の記事を取り上げ、次のような考察を試みている。

4/29 山陽新聞 春の褒章喜びの声

28日付で発表された春の褒章受章者。歩んできたのはC決して平たんな道ばかりではない。それでも、飽くなき探求心に後押し

され、受賞の喜びを語る今日がある。もっと、もっと先へ。これからも歩みを止めることはない。

日本人として最高賞

紫綬褒章

五輪フィギュア金

C羽生結弦さん

ソチ冬季五輪でフィギュアスケート日本男子初のコメダルに輝いた19歳は、紫綬褒章の知らせに「なかなかいただけるものではない。日本人として最高の賞と思う」と神妙な面持ちで喜びを語った。

A昨年12月のグランプリ・ファイナルと今年3月にさいたま市で行われた世界選手権で初優勝も果たし、急成長の今季3冠を達成した。人気も知名度もうなぎ上りだが、A早稲田大2年生は謙虚な姿勢で「スポーツのみならず、日本の発展に携わってきた方、偉人がもたらした『勲章』と理解している。そうそうたる方々の中に名前を刻めることが大変光栄」と感謝した。

C3年前の東日本大震災では練習中に被災し、生まれ育った仙台市内で避難所生活も経験した。B若きチャンピオンは首から下げた金メダルが復興に向けた希望の象徴となることを願うA「さらなる好成績を残せるように頑張っていかなければならない」と決意を示した。(写真省略)

☆要約

28日付で発表された春の褒章受章者に、フィギュアスケートの羽生結弦選手の名前が挙がった。

ソチ冬季五輪でフィギュアスケート日本男子初のコメダルに輝いた羽生選手は紫綬褒章、神妙な気持ちで喜びを語った。

昨年12月のグランプリ・ファイナル、ソチ五輪、今年3月に行われた世界選手権で初優勝を果たし、今季3冠を達成した。これだけの成績を収めながら、羽生選手は謙虚な姿勢で感謝の意を述べた。3年前の東日本大震災では苦しい思いもしたが、首から下げた金メダルに復興の思いを託し、決意を示した。

☆評価

A・羽生選手のすばらしさが印象的。

・GPファイナル、ソチ五輪、世界選手権で3連覇を達成したことが書かれており、彼の業績をまとめていたので良かった。受賞理由はそれだけではないと思うが、彼のことをよく知らない人でも、この業績を見れば納得してくれると思う。謙虚なコメントが載っていて、人柄やスケートに対する姿勢がうかがえる。

B・晴れやかな笑顔がすてきで印象的。

・若きチャンピオン、という表現が、次世代を担うエースという感じで良い。メダル＝復興の象徴というのも、被災地に人一倍目を向けてきた羽生選手らしくて良いと思った。

C・羽生選手はフィギュアスケートの選手なので、〝さん〟よりも〝選手〟のほうが良いのではないか。

・〝決して平たんな道ばかりではない〟の一環として震災の話があるのだが、彼が一時期スケートをやめようか悩んでいたことも書いてほしかった。

☆まとめ

私は羽生選手の大ファンなので、この記事を選んだ。

この記事では、羽生選手がどれだけすばらしいか、彼の人柄や

スケートに対する思いが述べられている。〝羽生結弦〟という一人のアスリートのことが非常に魅力的に描かれている。GPファイナル、ソチ五輪（初の男子金メダリスト）、世界選手権の3冠という偉業だけでなく、謙虚なひととなりを書き、読者に好印象を与えている。

私が誰かについて文章を書く時、このように人物を魅力的に読者に伝えていきたい。

写真の羽生選手も晴れがましい満面の笑みだが、このような素敵な一枚が読者の心をとらえ、また、新たなファンを呼ぶのでは、と勝手な推測をしてしまった。

羽生選手が震災でつらい経験をしたことについても触れられていたが、彼がスケートをやめようと考えていたことも書く、読者はよりいっそう感情移入しやすくなり、応援する人も増えると思う。

私の鼻眉目で見てしまった所もあるが、私にとつての〝羽生結弦〟のすばらしさを再確認できた。彼の魅力が伝わってくる良い記事だった。いつか私も彼のスケートを生で見てみたいと改めて思った。

（S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年五月二日提出）

S・Nさんは、Bの観点（表現）について、「若きチャンピオンという表現が、次世代を担うエースという感じで良い。メダル＝復興の象徴というのも、被災地に人一倍目を向けてきた羽生選手らしくて良いと思った。」と記し、ことばの選び方に着目した評価を行っている。交流の場面でことばの選び方という着眼の良さを全体に指導することにより、受講生全体が効果的なことばをとりあげた分析や考察を充実させるようになっていった。

また、まとめとして、「私は羽生選手の大ファンなので、この記事を選んだ。この記事では、羽生選手がどれだけ素晴らしいか、彼の人柄やスケートに対する思いが述べられている。羽生結弦」という一人のアスリートに対する思いが述べられている。G Pファイナル、ソチ五輪（初の男子金メダリスト）、世界選手権の三冠という偉業だけでなく、謙虚なひととなりを書き、読者に好印象を与えている。私が誰かについて文章を書く時、このように人物を魅力的に読者に伝えていきたい。写真の羽生選手も晴れがましい満面の笑みだが、このような素敵な一枚が読者の心をとらえ、また、新たなファンを呼ぶのでは、と勝手な推測をしてしまった。」と記し、事実と合わせてひととなり伝えることの効果に着目している。

文集作成においては、インタビュをして、人物についての文章を書くことを求めており、その際、この記事に学んだことが生かされると考えた。実際に作成した文集『記事文集 にはんこⅣ』（注3）において、S・Nさんは、ここでの学びを生かして国語科教員経験者であるR・S氏にインタビュを行い、R・S氏の国語科教員としての魅力を「学びの形」という文章にまとめている。

また、写真の効果についても実感のこもった分析がなされており、この点も文集作成の場で生かされると思われた。

第五回（二〇一四年五月二〇日・火）の講義では、大村はま氏の実践から、「単元 表現くらべ」（注4）を取り上げて、新聞を活用したことばの学習指導について指導した。新聞スクラップブックの分析において、Bの観点（表現）でことばをとりあげた考察が充実してきていると感じたためであった。「単元 表現くらべ」は隅田川の花火大会について報じた新聞四紙の記事を比べて考えること

で、ことばに対する感覚を鋭くする学習指導であった。

N・Iさんは、この単元に学び、サッカーワールドカップブラジル大会の日本代表メンバーを報じた二〇一四年五月一三日（火）の毎日新聞、朝日新聞、読売新聞三社の記事を比べて、次のように新聞スクラップブックの課題に取り組んだ。

5月13日 毎日新聞 一面

W杯代表23人決定 香川、柿谷ら初選出

「攻撃的選手選んだ」

（記事省略）

A今後の日本代表の主な日程の表

↓他の新聞にはなかった工夫

選手の発表だけでは終わらない

B継続性を重視するザッケローニ監督が大久保の名前を読み上げると、詰めかけた報道陣から「おおー」と大きなどよめきが上がった。

↓注目されていた大久保選手の発表のときの会場の臨場感がいきいきと感じられる。

説明的な文章の中に、描写が入る対比がおもしろい。

〈まとめ〉

読者が何を望んでいるか、知りたいか（選手発表↓いつ試合をやるか）を考えて記事にしている。

説明的な文章の中に、異色な描写文を入れることで、より臨場感が味わえるし、上手い文章の対比だと思ふ。

5月13日 朝日新聞 一面

ザックJ攻撃的布陣 代表23人決定 本田・香川・大久保ら
サッカーW杯2014ブラジル大会
悔しさ晴らす

(記事省略)

A①4年間積み上げてきた「日本らしい」パスをつなぐ攻撃的な
サッカーでブラジルに乗り込む覚悟を示すメンバー選考になっ
た。

↓筆者の言葉で分かりやすくまとめられていて、すごく良い。

A②「悔しさ晴らす 香川真司は」

↓サッカーのことをあまり知らない私は、有名である香川真司
選手が初選出だったことに驚いたので、今までの香川選手の
ことについてまとめてある記事は分かりやすい。

一面の記事に香川選手のまとめを持つてくることにより、そ
れだけ期待をこめていることも読み取れる。

〈まとめ〉

事柄をそのまま述べたり、説明したりするだけではなく、自分
の言葉で新たに分かりやすくまとめて表現するのがすごく惹かれ
るし、よりおもしろく感じる。

また、注目されていることや自分の興味のある伝えたいことを、
あえて一番目立つところに書く、文章の選び方も重要である。

5月13日 読売新聞 一面

W杯23人決定 香川、遠藤ら順当 大久保滑り込む
「ブラジル破り優勝」 本田12歳の夢

(記事省略)

A①日本代表ザッケローニ監督の話

「ブラジルに行くに値する選手がたくさんいたので、23人に絞
る作業が非常に難しかった。これまで一緒に戦い、積み上げて
きたことを大切にしたい。自分たちのサッカーをしてできるだけ
前へ進みたい。」

↓23人のW杯登録メンバー発表ということで選手にばかり注目
がいきがちだが、ザッケローニ監督がどう思っているんだか、
という所までまとめて書かれており、他の新聞より詳しく知
りたいことが書かれている。

A②「ブラジル破り優勝」 本田12歳の夢

↓朝日新聞は香川選手を取り上げていたのに対し、読売新聞で
は、本田選手が取り上げられている。本田選手の夢や有言実
行されてきた、すごいと思わされる生き方に、ACミランで
活躍できなかった印象を払拭してくれる新しい情報である。

B プレーなどの特徴

↓サッカーにあまり詳しくない私からすれば、どの選手がど
んなすごさを持っているのか、顔写真とともに分かり、すごく
分かりやすい。

〈まとめ〉

読者が何を知りたいか、どんなことを書けばテレビだけでは伝
わりきらなかったことを読者に知ってもらえるか、ということ
を中心に考えて文章の取捨選択をしなくてはならない。

新しい情報を与えることで、違うイメージを読者に与えること
ができる。

(N・I 新聞スクラップブック 二〇一四年六月三日提出)

N・Iさんは、三社の記事を比べ、それぞれの良さを次のように評価した。毎日新聞の記事については、内容面で選手発表とともに主な日程案を示し、読者の知りたいことを先取りしていること、表見面では説明的な文章の中に描写を入れることによる効果を指摘している。朝日新聞の記事については、内容面では初選出の香川真司選手を取り上げ、注目されていることを前面に押し出していること、事柄をそのまま説明するだけでなく筆者の言葉で新たに分かりやすくまとめて表現することの良さに目を向けている。読売新聞の記事については、内容面で監督の選手決定の際の思いまで取材していること、本田圭佑選手の少年時代の夢を紹介していることなど読者が知りたい新しい情報を与えることの価値に言及している。

N・Iさんは、3紙の記事を比較することによって、それぞれの記事の特長をとらえ、いずれも読者のニーズを意識した取材の効果や取材を生かした効果的な表現の工夫に着目して分析し、自らの表現に生かすポイントを学び得ている。

第七回(二〇一四年六月三日・火)の提出で、S・Nさんは二〇一四年五月二九日(木)の山陽新聞から、新見・千屋小学校における百人一首朗唱の記事を取り上げて、次のように考察している。

5/29 山陽新聞

教育再考 学校現場⑥

百人一首朗唱(新見・千屋小)

古典活用し地域と交流

B「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の…」有明のつれなく見えし別れより…」

鳥取県境に近い山あいの千屋小学校(新見市千屋花見)は、百人一首の朗唱で1日が始まる。

A玄関そばの壁には10首の歌が手書きされた模造紙(縦2メートル、横0.8メートル)が掲示されている。全校児童22人は登校するなり、その前でC独特のリズムに乗せて読み上げる。「毎日声に出していると自然に頭に入ってくる」。5年池田航平君(10)は笑顔で話すと、一気に階段を駆け上がったといった。

A同小は伝統文化の学習として百人一首を活用している。月替わりで10首ずつ毎朝読み上げ、10カ月で全ての歌を覚えるのが目標だ。子どもたちの声にB耳を傾けていた高野清之校長は「継続は力なりです。少しずついい、興味をもってくれたら」とB目を細める。

千屋地区は冬になると1メートル近い積雪に見舞われる。外出できない間、住民は囲碁や将棋といった遊びに興じた。B百人一首も同じで、テレビもない昭和の初めごろまでは若者にとってもたしなみの一つだったという。

現代の千屋小児童が、鎌倉時代の歌人藤原定家を選んだ和歌と向き合うきっかけは2000年にさかのぼる。地元の人々クラブ会員有志が「井原かるた同好会」を結成。地域の伝統を復活させ世代間交流に生かそうと学校側にカルタ交流会の開催を呼び掛けた。初めのうち、児童たちはお年寄りに札を取られるばかり。09年、当時の校長井上克彦さん(60)はB心を痛め、朗唱の習慣付けを考えついた。「歌を覚えたという喜びは、学問に対するやる気に

もつながると思った」と振り返る。

B 学習効果を高めるため、全校集会では歌われている花や情景を写真を交えて解説。図書室の一角に枕草子など古典文学約30冊を集めたコーナーを設けた。そこで源氏物語をB手にした6年船曳亜侑さん(11)はB「百人一首を知っていたせいか、当時の人たちの気持ちが分かって面白かった」とB目を輝かせる。

さらに同小は12年度から、地域住民を招き学校活動を紹介する「千屋っ子祭り」(10月)や学習発表会(12月)百人一首の朗唱を始めた。高野校長は「最近では児童と声をそろえて朗唱する参観者も増えてきた」と手応えを語る。

1年を通じた学習の成果が試される2月のカルタ交流会。今年の会では、同好会のメンバーの本田協さん(86)が「もう高学年とは真剣勝負ですよ」とB舌を巻くほどの実力を見せつけた。

子どもたちの成長ぶりを見て、高野校長は「百人一首は多くの先人に思いをはせ、感性に触れることができる大切な教材」と意を強くする。本田さんは「社会人になっても教養として親しんでほしい。そして自分たちの子や孫と札を取りあってくれば」と言い、百人一首を通じた学校との連携の先に地域の将来を思い描く。(写真省略)

取材を終えて

継続は着実にB実を結ぶ

A 千屋小学校では定期的に百人一首の暗唱テストをして達成度を確認。2013年度末には、全児童の8割に当たる20人が100首を覚えていたという。着実に続けることが実を結ぶことを身をもって知った子どもたちには、他の学習にも同じ姿勢で向き合っ

てもらいたい。

A 各学年において継続して指導し、古典に親しめるように配慮すること。小学校学習指導要領は国際的に活躍する日本人育成の一環として、伝統文化に触れる教育の充実を求めている。A 学校側はさまざまな古典に出会う機会を提供し、児童の感性を育んでほしい。(赤沢昌典)

☆要約

新見市千屋小では、百人一首の朗唱で一日が始まる。同小では伝統文化の学習として百人一首を活用し、毎月10首を毎朝読み上げる。10カ月ですべての歌を覚えるのが目標だ。

2000年に地元の老人クラブ会員有志がかかる同好会を結成し、地域の伝統を復活させ、世代交流をはかるという目的で学校側にカルタ交流会の開催を呼びかけた。

初めはお年寄りに札を取られるばかりで、当時の校長が「朗唱の習慣付け」という案を考えついた。

学習効果を高めるために、全校集会で、歌われている花を解説したり、図書室の一角に枕草子などの古典文学約30冊を集めたコーナーを設けた。今年2月のカルタ大会では、同好会メンバーも舌を巻くほどの実力を見せつけた。

子どもたちの成長ぶりから、大人たちは百人一首を通じた学校との連携の先に、地域の将来を思い描いた。

☆評価

A・百人一首を取り入れて勉強する、地域の人と交流するという一石二鳥の取り組みが良い。まさに「開かれた学校」に近いものを感じた。

- ・ 掲示物の様子が書いてあり、サイズの記述もある。
- ・ 同小の目標である、10カ月ですべて覚えるというのが無理のない範囲で定まっている。「取材を終えて」のところで、結果として8割が100首すべて暗記できていたとある。子どもたちの努力の跡を、読者にアピールしている。
- ・ 学習指導要領についても述べられており、よく取材していると思った。

B・「あしびきの」や「有明の」という文から始まっており、ムードが出てきている。これから百人一首の話題をするという時にふさわしい導入だ。

- ・ 千屋地区と百人一首の関わりについてあり、昭和初期にはたしなみの一つだったことが分かる。

- ・ 学習に向かわせるための取り組み例。全校集会で歌に出てくる花・情景などを解説したり、古典の本のコーナーを図書室に設置したりしている。自然と学習に向かわせるという点で、また大村はま先生のお考えと共通していると思った。児童のインタビューからも、彼女が自発的に学ぼうとしていることが分かる。

- ・ この記事では慣用句が多く使われており、1〜2時間を使って単元が作れそうだと思う。

C・独特のリズムという変わった表現が気になった。記者なりに工夫したのかもしれないが、なんだか珍妙な感じがした。ふつうに「五・七・五・七・七」の方が読者も受け入れやすいと思う。

☆まとめ

今回の記事も、前回と同じく大村はま先生のお考えに似たもの

を感じた。〴〵よっとしたら、皆大村はま先生のお考えを無意識に受け継ぎ実践しているのかも〴〵と思った。

この記事では、千屋小の目標〴〵10カ月ですべてを覚える〴〵や「取材を終えて」でその結果を書いている。努力と継続は報われることを読者に印象づけ、取材した記者の願いも記されている。また、小学校の学習指導要領についても触れてあり、取材範囲の広さに驚いた。

文頭を百人一首の歌で始めることで、雰囲気を作り、これからその話をするという時にふさわしいと思う。記者の工夫がうかがえる。

この記事では、〴〵目を細める〴〵〴〵心を痛める〴〵といった慣用句表現が多用されており、単元（ことばの学習）が展開できると考えた。（慣用句を探し出し、小グループに分け意味調べをさせ、その語句を使った文例やシチュエーションを発表する）（後略）
（S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年六月三日提出）

S・Nさんは、まとめとして、表現について「文頭を百人一首の歌で始めることで、雰囲気を作り、これからその話をするという時にふさわしいと思う。記者の工夫がうかがえる。」と書き出しの工夫について学び得たことを述べている。

また、「この記事では、〴〵目を細める〴〵〴〵心を痛める〴〵といった慣用句表現が多用されており、単元（ことばの学習）が展開できると考えた。（慣用句を探し出し、小グループに分け意味調べをさせ、その語句を使った文例やシチュエーションを発表する）」と記している。S・Nさんは、新聞記事に表現の工夫を学ぶことのみならず、

学習者を自然に学習に向かわせていく大村はま氏の学習指導に学び得たことをふまえ、学習材としてこの新聞記事を活用した語句・語彙の単元を構想している。こうした新聞記事を資料とした学習指導の構想を全体に紹介し、国語科の教職課程履修生として評価できると受講者に伝えた。

なお、「日本語表現法Ⅰ」においては、第七回の講義において文集作成のガイダンスを実施して、テーマ設定、グループ決定などを行い、文集作成の準備に取りかかった。

第九回（二〇一四年六月一七日・火）の提出では、S・Nさんは、山陽新聞二〇一四年六月一二日（木）の染色家久保田一竹の記事を取り上げている。

6/12 山陽新聞

A 岡山・矢掛で「一竹辻が花展」

B 濃密な色の重なり

染めにB圧倒的な情念

B 連山に秋の気配が忍び寄り、燃えさかる落陽は大地を照らす。やかげ郷土美術館（岡山県矢掛町矢掛）で開催中の「一竹辻が花展」会場はB一巻の妖しい物語のようだ。A中世の染め技法を独自の表現に昇華させた染色家久保田一竹（1917～2003年）の作品世界が、B圧倒的なエネルギーと情念で見るものに迫ってくる。（平井美佳）

同町合併60周年の記念展。久保田一竹美術館（山梨県）所蔵の代表作20点を通して国内外でB旋風を巻き起こした業績を紹介する。

A「辻が花」は室町から安土桃山時代に隆盛した瀟洒な模様染め。縫い絞りを主とし、染め残した白地に墨絵を描いたり摺箔や刺繍を施したとされる。江戸時代に技の継承が途絶えたため、多くの作家らが各自の解釈でB「再現」に挑んできた。

14歳で友禅作家に入門した久保田もその一人だ。20歳のとき東京国立博物館で見た小さな小裂に心奪われ、40歳から研究に没頭。無名だった60歳の年に「一竹辻が花」を発表して世間を驚かせた。長年のB口をのりする生活をものともしないほど彼を駆り立てたのは何だろう。巨大な落日が題材の作品を「燦」にヒントがあった。B真つ赤な雲を伴い沈みゆく太陽は、第2次大戦後のシベリア抑留で「いつかあの色を辻が花で表したい」と、飽きずに眺めたものという。

創作の源は、美への憧れや渇き、望郷の念といった20代で経験した胸を締め付ける思い。そこへ舞台衣装で培ったBダイナミックな構図や配色、化学染料を幾重も差す手法が加わり、B20世紀の辻が花が完成したのだ。

A「小裂の魅力は300年かけて生まれた退色や古色。いくらまでも現代人には出せないという諦めに似た発見が転機だった」と、久保田に師事した宮原作夫館長は明かす。「ならば自分の思う道を突き進むまで、と」

その通り、並ぶ着物は独創性にあふれる。四季と宇宙を計75連作で映し出そうとした「光響」シリーズからはB「序」など秋の風景5点を展示。B横につなぐと屏風絵のように広がる山並みに、針葉樹や花、湖が息づく。同じ富士山でも山麓から望む「恩」、夕立一過の静寂を切り取った「蔭」と表情に富む。

古人が絞りを伸ばして染め上がった模様を見せたのと逆に、久保田はしわの立体感で絵を描いた。B濃密な色調は光の具合によって揺れ動き、さらにコントラストを増す。

どっしりと力強い作品群の中、意外にも目を引くのはB青の濃淡だけで水面の輝きを捉えた「幻蒼」やC古典文様の「亀甲松皮」。久保田が本当に染めたのは、夕日が山端に消えた後の沈黙、さざなみの余韻、いにしへの栄華、そんな見えない美だったのかもしれない。

同展は山陽新聞社など主催。22日まで。(16日休館)

(写真省略)

☆要約

矢掛町のやかげ郷土美術館では、染色家・久保田一竹の作品を展示する「一竹辻が花展」が開かれている。

「辻が花」は室町から安土桃山時代に隆盛したすっきりして垢抜けた模様染めだが、江戸時代に技の継承が途絶えたため、作家は独自の解釈で、再現に挑んできた。

久保田は20歳の時に見た小裂に心を奪われ、その思いとダイナミックな構図や配色などが加わり、ついに20世紀の辻が花が完成した。

同展は山陽新聞社などの主催で、22日まで開かれる予定。

☆評価

A・染色家・久保田一竹と辻が花についての詳しい説明がある。

・辻が花完成までに至るエピソードを導入することで、彼が作ったものがよりすばらしいものだと感じさせられた。

B・冒頭「連山に」は、「序」の美しさの描写。

・「濃密な色の重なり」というのは、久保田がそこに込めた思いを感じ、労力と時間をかけて作られたと分かる。

・「圧倒的なエネルギー」とあるが、「序」「幻蒼」を見た時、美しさと上品さが印象に残ったので、ふさわしい表現だと思った。

・口をのりする↓やつとの思いで生活すること。

・「彼を駆り立てたのは何だろう」と書くことで、読者に想像させる働きをしている。

・「燦」について、赤々と染まる夕焼けを優美に表現している。他にも「一緒で」「恩」と「蔭」は同じ富士山でも違うシチュエーションから臨んで作られたものということが分かる。様々な

場面を切り取った作品というのを感じたが、記者の表現の仕方も優雅で奥ゆかしいと思う。

・20世紀の辻が花というの、一日一技の継承が途絶えたが、諦めずに完成した久保田の努力の結晶ということの比喻だと思ふ。

・「序」の描写は、実際の秋の風景を取り入れており、目に浮かんでくるようだった。個人的には、針葉樹や花、湖が息づく、という表現が気に入った。

・「久保田が本当に染めたのは、」の中の、「夕日が山端に消えた後の沈黙」＝「序」、「さざなみの余韻」＝「幻蒼」、「いにしへの栄華」＝「亀甲松皮」を表していると思う。

・全体的に見て、文学的な表現が多い。(例「真つ赤な雲を伴い沈みゆく太陽」「夕立一過の静寂を切り取った」また、古

典型的で上品な印象を抱いた。

C・「小裂」とは、布などの小さい切れはしのことか。辞書で該当する読みはあっても漢字はなかったたので、違いを知りたい。
・目を引くところがあるが、亀甲松皮の写真がなく残念だ。

☆まとめ

この記事を読んで、辻が花の圧倒的な美しさが目に焼きつき、表現の仕方も優雅で良いと思った。

まず、『濃密な色の重なり』『圧倒的な情念』で、久保田が辻が花に込めた思いや印象的な着物の様子が伝わってきた。手間をかけて作ったことも分かる。

次に、着物の様子を表すところも気に入った。同じ富士山を違うシチュエーションから臨んで作られた『恩』と『蔭』、秋の風景を取り入れた『序』など、様々な着物の美しさを表すことばが非常に文学的だと思った。記者が日本文化のことを題材にしているので、意図的にそういった表現をしていると考えた。
『山の端』『さざなみ』『いにしえ』は、古文でよく見かけることばで、辻が花が作られた時代とはかなりずれているが、優雅な王朝美を感じさせる。この記事には、日本古来の美しいことばがたくさんちりばめられてある。

最後に、『20世紀の辻が花』というのは、江戸時代に継承が一旦途絶えたが、それでも諦めずに完成させた久保田の努力の結晶を比喻で表している。

私はこの記事を読んで、久保田の強い思いとこだわりを感じた。やはり久保田は、『20世紀の辻が花』を生み出し、染色界の金字塔を打ちたてた人物というべきだろう。

伊木 洋 教職課程におけるNIE実践の有効性

(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年六月一七日提出)

S・Nさんは、まとめとして、「この記事を読んで、辻が花の圧倒的な美しさが目に焼きつき、表現の仕方も優雅で良いと思った。まず、『濃密な色の重なり』『圧倒的な情念』で、久保田が辻が花に込めた思いや印象的な着物の様子が伝わってきた。手間をかけて作ったことも分かる。次に、着物の様子を表すところも気に入った。同じ富士山を違うシチュエーションから臨んで作られた『恩』と『蔭』、秋の風景を取り入れた『序』など、様々な着物の美しさを表すことばが非常に文学的だと思った。記者が日本文化のことを題材にしているので、意図的にそういった表現をしていると考えた。『山の端』『さざなみ』『いにしえ』は、古文でよく見かけることばで、辻が花が作られた時代とはかなりずれているが、優雅な王朝美を感じさせる。この記事には、日本古来の美しいことばがたくさんちりばめられてある。」と記している。S・Nさんは、ここでは「日本古来の美しいことば」に着目して充実した分析、考察を行っており、語句・語彙を豊かにする単元における学習材としての可能性を見出している。

なお、第九回の講義では文集成成の第一回編集会議を実施し、以降通算五回の編集会議を行って文集を作成していった。

第一二回(二〇一四年七月八日・火)の提出では、S・Nさんは、山陽新聞から二〇一四年七月二日(水)の陶芸家岡本欣三の記事を取り上げている。この記事は久保田一竹の記事を書いた記者(平井美佳氏)による記事であった。S・Nさんはまとめとして、「以前久保田一竹の辻が花について書いたが、文章の表現や構成が似てい

た。記者の名前が同じ人だったので、書き方などに納得した。今回も「花瓶に鳥の親子を」や「パレットは年を追って色数を増し」といった文学的表現が見られる。最後の「西日本屈指の独立峰は」という印象的な結びも共通しており、作品と作家を関連させた締め、記者の工夫を感じた。見出しに「異才」や「独立独歩」と入れることで、彼の人並み優れた才能や、人とは違った道を行くことが分かる。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年七月八日提出)と記し、記者の文章表現の特徴を分析している。さらに、「私が一番面白いと思ったのは、作品の描写をする際に、記者がまるで岡本になりきっているような所だ。心のままに表現した」や「朗らかな作風が培われていく」など、彼の作品の特徴をよくとらえた上で描写している。平井さんは個性的な表現が多いが、読者を飽きさせないような工夫をしており、自分の文集作成時にもぜひ参考にしたい。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年七月八日提出)と述べ、記者である平井美佳氏の文章表現の工夫に学び、自らの文章表現の参考にしたいと記している。

なお、第一二回の講義では、山陽新聞社の佐藤貴宏氏を特別講師としてお招きし、「伝えるための記事原稿とレイアウトの工夫」と題する特別講義を実施した。受講生は新聞スクラップブックの作成を通して文章表現の工夫を学んでおり、実際に記事を執筆なさっている佐藤氏に文集作成の場において迷っていることについて、必要感を持って相談した。

第一三回(二〇一四年七月一日・火)の提出では、S・Nさんは山陽新聞の二〇一四年七月九日(水)に掲載された実践女子大学教授、横井孝氏の古典文学『夜の寝覚』についての寄稿「解明進む

『夜の寝覚』幻の物語が現実に」を取り上げている。国語科教育、とりわけ古典教育に関心を持つS・Nさんの問題意識に基づいて記事が選ばれている。まとめとして、「この記事では、『幻』ということばを四回も入れているが、強調したいということへのあらわれだと思った。『幻』ということば自体に「実在しないのにその姿が見えるもの」という意味があるので、この表現は適切といえる。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年七月一日提出)と記し、キーワードに注目した考察を行っている。

また、「横井教授は『源氏物語』と『寝覚』のあらすじの対比をしており、平安時代にはめずらしいタイプだったことが分かる。他の作品と比べながら、寝覚の上の生涯を見ていくのは構成として非常に効率的だと思う。その後の末尾欠巻部の『拉致』や『仮死状態』といった展開の推定を見て、確かに当時の女性としては希有な激動の運命だと思った。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年七月一日提出)と述べ、『源氏物語』と『夜の寝覚』の比較による効果を指摘している。

さらに、S・Nさんは「記事中に『残欠』『錯宗』『勇躍』ということばがあり、中・高のことばの学習にびつたりだと思った。特にどれもふだん目にしない表現なので、難しいことばをとくに学ぶという点で良いと考えた。さらに、古文を題材にしているので、文学史と関連づけた学習でも良いかもしれない。また、『こっそり』『収獲』『再出発』といった表現から筆者の意図を考える学びもできる。(最初にこの記事を配布して、難しいことばやめずらしい表現を挙げる。その後四人・五人のグループを作り、グループで一つのことばを辞書で調べたり、シチュエーションを考えたりして、プレゼンテーション

ンの形でグループ別に発表する。最後に筆者の意図や、平安時代の文学史について、教師とともに学ぶ。夜の寝覚の一部は研究者たちの中で大発見となったように、この記事も私にとって国語の学習の可能性を広げてくれた良いものだった。今後も、新聞を利用したことばの学習を考えていきたい。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年七月一五日提出)と記している。ここには、国語の教師を目指すS・Nさんが、単元構想という自己の問題を発見し、その課題を解決していくうえで、新聞を利用したことばの学習を考えていこうとする意欲が表れている。

第一五回(二〇一四年七月二九日・火)は、「日本語表現法Ⅰ」の最終講義日であった。

この日の提出で、S・Nさんは、二〇一四年七月二七日(日)の山陽新聞から、夏の高校野球の記事を取り上げている。まとめとして、「この記事では最初関西つてすごいと思わなかった。しかし、読み進めていくうちに、両校の人々の思いの詰まったドラマのようで、人物描写もいきいきとしていた。」と内容や描写について分析している。

そのうえで、「また、この記事では中学校で学習材として使用するのに最適だ。『雌雄を決する』『肩すかしを食らう』『おえつが止まらない』ということばの学習はもちろんだが、両校の選手についての描写の仕方や心情を考えるとすることもできる。特に創志北川さんのコメントからは、涙をこらえて語っている様子が伝わる。これは、C読むことの指導に使えると思った。題材も高校野球のことなので、中学生(特に男子)には興味湧きやすいだろう。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年七月二九日提出)と記して

いる。S・Nさんは、学習者の興味・関心をふまえて、新聞を学習材としたことばの学習や読むことの学習を構想しており、新聞スクラップブックの作成が単元構想力の向上に生かされている。

新聞スクラップブック作成の取り組みを終えて、S・Nさんは「正直最初は何を書いて良いか分からなかったが、友達のを参考にしなが、自分オリジナルの分析ができるようになった。書き出したら止まらなくなり、楽しかった。さらに、学習材としても使えることを再認識させられた。」(S・N 新聞スクラップブック 二〇一四年七月二九日提出)と記している。ここには、S・Nさんが交流活動を通して、分析、考察を充実させていったことが示されている。また、新聞を学習材として活用することについても認識を深めていることが表れている。

おわりに

教職課程におけるNIE実践の有効性について整理してみると、次の三点を導き出すことができる。

第一に、NIE実践では、指導者として必要な実践的な言語能力を体得するための多様な場の設定が可能であることがあげられる。書くことの学習指導においては、指導者として、モデルを示したり、書き出しのヒントを与えたりするなど、指導者自身に書くことの実践的な能力が求められるが、本実践のように教職課程におけるNIE実践は、指導者を目指す学生自身が、書くことの多様な実の場を得ることができるという点で有効である。

第二に、NIE実践は、教職履修生として、自己をみつめ考えて

みるべき話題を選び出し、自分の意見を育てていくことができる点で有効である。本実践においてS・Nさんが国語の教師を目指して、教育やことばの文化に関する話題を取り上げ、自分の意見を深めていったように、受講生一人一人が、新聞スクラップブックの作成を通して、自己の興味・関心を出発点として、自己と社会を結びつつ、教職履修生として自己の内なる問題と向き合い、考えてみるべき課題に目を向けていくことができる。

第三に、教職履修生自身がNIE実践を体験することによって、新聞に対する関心を高め、新聞を活用した単元の可能性に目を向けていくという点で有効性が認められる。N・Iさんは大村はま氏の単元に学んだことを生かして、自らが実際に3紙の新聞を比較し、新聞を活用した単元の可能性に目を向けようと試みた。S・Nさんのように、実際に新聞を資料とする単元の構想に取り組みうとする受講生が出現したことは、NIE実践に対する関心を高め、新聞を活用した単元構想に取り組み指導者の育成に有効であることを実証している。

教職課程の履修生には、「日本語表現法Ⅰ」終了後も、教育問題に関する新聞スクラップを行うよう課題を提示している。新聞を読む習慣を継続させ、新聞記事に文章表現の工夫を学びつつ、新聞を活用した単元の構想へさらに関心を持たせていくことが、今後の課題である。

教職課程におけるNIE実践の有効性はきわめて大きい。文章表現力の向上はもとより、体験を通してNIE実践に対する認識を深めることは、国語教室を豊かなものにしていくことにつながっていくに違いない。

付記

「日本語表現法Ⅰ」における新聞スクラップブック作成の試みは、本講義の前担当者、大滝一登先生のご実践をふまえている。

注1 エヌ・アイ・イー 教育に新聞を

注2 大村はま氏は「作文の基礎力を養うための学習」一覧表をまとめており、「中学作文」はその一つ一つの練習に使った資料集である。

注3 伊木洋編(二〇一四)『記事文集 ほんごⅣ』私家版

一〇―一一頁

注4 「単元 表現くらべ」は、大村はま氏による新聞を活用した実践(一九七九年石川台中学校一年生)、学習目標を「ことばへの感覚を鋭くすること」において指導が進められている。

参考文献

伊木洋編(二〇一四)『記事文集 ほんごⅣ』私家版

大村はま(一九七〇)『国語教室の実際』共文社

大村はま(一九八三)「中学作文」『大村はま国語教室第五巻』筑摩書房

大村はま(一九八三)「単元 表現くらべ」『大村はま国語教室第九巻』筑摩書房

『山陽新聞』(二〇一五年九月二三日)「岡山県NIE推進協 大学部会セミナー 専門分野で効果的に」

『山陽新聞』(二〇一五年一〇月二八日)「実践!NIE 文章表現の工夫学ぶ」

橋本暢夫（二〇〇一）『大村はま国語教室に学ぶ―新しい創造のた
めに』溪水社

橋本暢夫（二〇〇九）「NIEの先駆者大村はま―単元「新聞」に
よる「自己学習力」の育成―」『大村はま「国語教室」の創造性』
溪水社

橋本暢夫（二〇一三）『大村はま国語教室 全15巻 別巻1』巻別
内容総覧』溪水社

（いぎ ひろし）本学 文学部 日本語日本文学科）

キーワード＝教職課程、NIE、大村はま